

東京教区時報

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.htm> E-MAIL: comm.tko@nskk.org
Phone: 03-3433-0987, Fax: 03-3433-8678 Diocese Office

2006年12月10日発行
日本聖公会東京教区
港区芝公園3—6—18
編集人 伊藤裕元

第103(定期)教区会のためにご参集下さいましたことを感謝申し上げます。開会のご挨拶に代えて、慣例により、日本聖公会並びに東京教区の現況につきいくつかの点を分ち合いたいと思います。

日本聖公会第56(定期)総会について、このあと、山田益男代議員が報告されますが、そこにもありますように、50年ぶりに、聖歌集が改訂されることこの春決議されました。5月から数ヶ月の短い期間に改訂委員の方や管区事務所の方々が夜を

《東京教区第103(定期)教区会》 開会演説

教役者の増強へ向けて分担金の見直し

課題を抱えてヴィジョンと体制の確立へ

新「聖歌集」で豊かな信仰生活を

東京教区主教 植田仁太郎

日に継ぐぼう大な最終原稿の作成作業を下さったおかげで、11月1日付で刊行の運びとなりました。みなさん

の注文全部に応じるだけの部数がまだ印刷されていらないようですが、新しい聖歌集を、みなさんが期待をもって迎えて下さっていることを大変うれしく思っております。

新「聖歌集」を

16世紀の宗教改革をとおして、教会の音楽が聖職団や修道士や聖歌隊などの専門家集団の占有物ではなく、礼拝

に参加する全会衆が唱和する共同の礼拝に欠くことのできないものであるという本質が、もう一度回復されることになりました。そして各時代に、また世界の各地で、個人や共同体の信仰を表明する数多くの讚美歌、聖歌が生み出されてきました。その創造に携わる人は、大作曲家や大詩人である必要はなく、たまたま信仰的創造力を賜



り、それを人々と共感できる形にすることができるとも、聖歌の創造の機会が与えられています。今度の新「聖歌集」の最大の意義は、この12年間の作業の間に、そういう信仰的創造性の発掘に相当の努力が払われたということでしょう。ここで「聖歌集」の設計意図（デザイン・コンセプト）の解説をくり返すつもりはありませんが、「古今聖歌集」との一番大きな違いは、そういう聖歌を生み出すスノ野を広げる努力が意図的に為され、私たち日本聖公会自身の礼拝共同体の中から生まれた曲が多数採用されたことだと思います。また欧米の文化の中で育てられた詩・曲ばかりでなく、アジアや中南米の聖歌の持つスピリチュアリティーに注目し、まだ決して多いとは言えませんが、何曲かが採用されたことだと思います。新しい聖歌集を手に取られたら、ぜひ、改訂委員会が記しておられる「はじめに」をお読み下さって、この聖歌集が企図したことをご理解下さるようにお勧めします。

選曲・採択の判断

そこに記されていないことをひとつ補足させていただきます。現行「古今聖歌集」から約4分の1の曲・詩は採用されませんでした。「試用版」「増補版」からも全曲が採用さ

れたわけではありませんが、つまり、ここにはひとつの「判断」が為されているということですが、良く、教会には色々な信仰的・政治的・神学的立場の人がいらっしやるから、余り教会はひとつの立場を取るべきではないという主張がなされます。しかしその主張は必ずしも正しいとは思われません。教会は（特に聖公会は）聖書と伝統と理性（知性）に基いて、今の時代にあつて、絶対的にはなく、最良の判断をもつて神の前に正しいであろうとする立場を明らかにしてゆく必要があります。もちろん、それに納得できない人を排除することはありませんが、ある判

断を「教会」としてすること自体を避けてはならないと思います。「たてよいざたて」（412番）、「きたのはてなる」（290番）を採用しなかつた「判断」について、考えてみる価値はあると思います。言うまでもなく、これらの聖歌あるいは同様に採用されなかつたかも知れない、私たちの個人的な「好きな聖歌」を排除しようということではありません。

聖歌が収められているのかを把握した上で、広く用いられてゆくことを望みたいと思えます。そして、これまで以上に、礼拝の時、そしてひとりひとりの信仰生活を豊かにしてゆく助けとなるものが沢山与えられたことをみなさまでともに喜びたいと思います。

体制強化の予算化

さて、今回の教会会の主たる議案は、2007年の予算案の審議です。ご存知のように、教区事務所や教区の各委員会が来年度実施しようとして計画されていることは、すべて、この予算案に反映されます。詳しくは財政委員長ならびに各委員

会のご説明に委ねますが、2007年の東京教区の最大のプロジェクトは教区の「宣教・牧会体制の強化」です。実はその名称はどこにも表れておりません。その計画の詳細もありません。しかし、予算上では、宣教・牧会体制の強化に多大な先行投資をしようとしております。

大変うれしいことに、明年3月に、新たに4人の聖職候補生の方々が神学校を終えられて、それぞれ教会の宣教・牧会の現場に派遣されることになります。これだけの人材が一挙に与えられることは近年無かったことです。さらに特に

予算とは関係ありませんが、司祭を志願されて按手を待っている方々が4名おられます。これまた大きな恵みです。2007年は、このような人的パワーが大きくなる、その第一年です。そのパワーの増強にともなって、各教会の教区分担金額を据え置くと、2千7百万円近い不足分が生じます。今回の予算案では、その分を全額これまでの蓄え(伝道牧会資金)から取り崩すことで第一年としようとしております。しかし、この人的体制は、今後の教区の教役者の数の体制として継続するものであつて、さらに増加することを期待することはあつても、

それを減ずることを考へるべきではありません。ということとは、第二年(2008年)第三年(2009年)もいつまでも「資金」を取り崩すことはできませんから、第一年(2007年)のうちに、このような教役者数を今後支えてゆける分担金増額の体制を整えなければならぬということになります。2007年という年は、それを各教会が教区全体のために検討し、かなり具体的な方策を作り出していただかなければならない年だ、ということをお憶えいただきたいと思います。

言うまでもなく、伝道にエネルギーと情熱

を注ぐということは大切にしなければなりません。が、いつも伝道が教勢拡大にただちに結びつくと考えるのは単純過ぎると思いません。伝道・宣教の種を播く長い期間を経て、苦勞をいとわず教会の使命に忠実でいる時、思わぬ時に、予期せぬ時に、その播いた種が実を結ぶ、というのがいつも神さまのなさる業のようです。伝道というのは、ひとの心を神に向けるということのお手伝いですから、最終的には神さま自身の力が必要です。

教役者の増強へ

教役者数が今後一割あるいはそれ以上増加する体制を維持

してゆく上で、収入の増加への工夫を考へるとともに、支出を減らすことも真剣に考へなければならぬでしょう。関係委員会、また各教会の衆知を結集しつつ、たとえば、教区事務所や委員会の活動の縮少や、教役者の給与のカットなども考へなければならぬことになるかもしれません。それでも、これまでより多くの教役者の働きが、各教会のレベルで充分に発揮されてゆけば、「種播き」としての伝道活動が充実してゆくでしょう。もちろん、種播きの具体的な活動を各教会で試してみたいものですね。4名の人的パワー増加の年、執事から司祭へのパ

ワーアップが何人かに期待される年、その第一年が2007年だと申しました。同時に、4名の方が神学校を終えられますと、東京教区からの在学生はひとりも居なくなりません。早速わたし達は4名に続く方々を望み見なければなりません。2007年はそれをも期待して、たとえば家族のある方々も聖職を志す道を可能性として考え易くなるであらうことを考慮して、主教の判断のもとで、いくらかの扶養費を用意できるような手立てが、2007年の予算には含まれております。

教区の教会の発展と教区内の学校・施設の

充実のために、私がかねがね、東京教区には少くとも50人の聖職が必要であると主張しております。どうぞ2007年を、そのヴィジョンに向かう第一年として、祈りとともに、特に各教会にありまして、その体制へと向える志を整えていただきたく存じます。2007年が、大きなめぐみの年となりますよう願って、今日のご挨拶と致します。

《東京教区第103(定期)教区会》
2006年11月23日聖アンデレ主教座聖堂

〔編集・制作〕広報委員会